県単道路改良事業（沢渡・高遠線伊那市中殿島）

—緊急発掘調査報告—

宮場間様１号墳

１９８５年

伊那市教育委員会
伊那建設事務所

序

昭和59年度県単道路改良事業に伴なう沢渡・高遠線拡幅工事によって伊那市東春近中殿島にある宮場間様１号墳の緊急発掘調査が７月下旬から８月上旬にかけて実施されました。

この伊那市東春近地区には多くの塚がありますが、この塚の実態については全くと言ってよい程明らかにされていません。このような状況下であったために今回の調査に寄せる期待は極めて大きいものでありました。

発掘調査の結果は当初期待した程に成果はあがりませんでしたが、調査の状況及びその実態からして、東春近地区に現存している塚の性格がある程度推測できるようになりました。

報告書の刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた伊那建設事務所、深いご指導をいただいた長野県教育委員会、この発掘調査に精励された友野団長を始めとする調査団の各位、酷暑の中、直接手を下し、協力いただいた作業員各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和60年２月

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

凡　　例

1. 今回の発掘調査は、沢渡・高遠線拡幅工事に伴なう県単道路改良事業にもとずく報告書とする。

2. この調査は緊急発掘で、事業は伊那建設事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成して調査に当たった。

3. 本調査は昭和59年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡単にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美

◎ 図版作製者

∘遺構及び地形実測図

友野良一　　飯塚政美

◎ 写真撮影

∘発掘及び遺構

飯塚政美

∘遺物

飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例 …… (1)
目　次 …… (2)
挿入目次 …… (2)
図版目次 …… (2)
第Ⅰ章　環　境 …… (3)
第1節　位　置 …… (3)
第2節　地形・地質 …… (3)
第3節　周辺遺跡との関連 …… (4)
第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… (6)
第1節　発掘調査の経緯 …… (6)
第2節　調査の組織 …… (6)
第3節　発掘日誌 …… (7)
第Ⅲ章　遺　構 …… (8)
第1節　墳丘及び地層 …… (8)
第Ⅳ章　遺　物 …… (9)
第1節　磁　器 …… (9)
第Ⅴ章　ま と め …… (10)

挿図目次

第1図　春富地区遺跡分布図……(5)
第2図　墳丘及び地層実測図……(8)

図版目次

図版1　墳丘全景（東側より眺む）
図版2　墳丘全景（北側より眺む）
図版3　墳丘の土層（北側より眺む）
図版4　発掘調査実施地区（西側より眺む）

第Ⅰ章　環　　境

第1節　位　置

宮場間様1号墳は長野県伊那市東春近中殿島地籍、天竜川左岸河岸段丘面の突端部に位置している。この位置に至るまでの道順は次の通りである。国鉄沢渡駅で降り、国道153号線に沿って5分程北へ来ると、沢渡商店街が国道を狭んで両側にある。この商店街の北はずれ、信号のある交差点を左折すると、天竜川に橋がかかっている。この橋を殿島橋と言う。この橋を渡って東へ10分程行くと、左手に春富中学校、右手に東春近農協のカントリーエレベーターが見えてくる。直進していくと信号機のある十字路がある。この十字路を右手にとると東春近田原に、左手にとれば竜東橋を経て、伊那市街地に至る。この信号機の近くに伊那市役所東春近支所、光久寺がある。さらに直進してしばらく行くと、段丘崖面を利用してある道路のために急公配になる。この急公配な道路の中間あたりの右手に土を盛った塚がみえてくる。これが宮場間様1号墳である。付近一帯は山林に利用されている。段丘を登りつめて、平坦部になった左手に北沢バルブがある。この道路を県道沢渡・高遠線と言う。

第2節　地形・地質

宮場間様1号墳は伊那市内の東部地区、いわゆる竜東地区と呼ばれるところに位置している。この地域一帯は三峰川によって形成された三段の河岸段丘より成り立っている。従って、地形・地質は三峰川によって極めて強い影響を受けている。そこで三峰川の概略について「伊那市史自然編」には次のように記してある。『天竜川の支流としては伊那盆地においても最大であり、本地域としても最大である。赤石山地に発し、多くの支流をあつめ南流し、のち北流し、また西流し、天竜川にそそいでいる。途中、新山川が支流として本河川にそそいでいる。伊那市地域の河川としては最大のものであり、平坦地にでてからの流域面積も広く、六道原・美篶等の潅漑用水等に使用され、また春近発電所にも使用されている。山が深く幾多の支流を持っているので水量は豊かであるが、後背山地が中央構造線のとおっている場所であるので、多く崩壊性のある地質があり多量の濁流を流す。近年、美和ダム、高遠ダムなどができて、流量の調整が行われ変化はあまり季節的にないが、梅雨時等においては大いに流量の変化がある。また、ダム建設の結果、流量、流速がおとろえ、堆積がおこなわれ、途中砂利などの採取がある。調査のデータが得られないが、写真あるいは観察のかぎりでは、河床が年々あがってきている。この事実は、水害としても警戒すべき一つの事象である。』

第 3 節　周辺遺跡との関連

今回、発掘調査を実施した宮場間様 1 号墳は東春近中殿島に含まれている。東春近一帯、さらに富県一帯は古代には伊那郡福智（布久地）の郷に含まれていたのであろう。このようなことが推測できる書物として約千年位前に編纂された「倭名類聚鈔」があげられる。

春富地区で今までに発掘調査された遺跡は第 1 図春富地区遺跡分布図によれば④芝王遺跡、⑤舟ケ洞遺跡、⑭まこもが池遺跡、⑮御殿場遺跡、⑳根木谷中畑遺跡、㉔小御堂遺跡、㉕阿原古墳、㉛三ツ木遺跡、㊻上原遺跡である。

芝王遺跡は富県新山四方にあり、昭和58年度に県営圃場整備事業のため緊急発掘調査を実施した。その成果は奈良・平安時代の竪穴住居址16軒、中世の竪穴12基、柱穴群 1 基であった。その他、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世の陶器、内耳土器が出土した。舟ケ洞遺跡は富県新山四方にあり、昭和57年度県営圃場整備事業のため緊急発掘調査を実施し、縄文早・前期・近世陶器片の出土をみた。まこもが池遺跡は富県貝沼にあり、昭和42年土地改良事業のために弥生後期竪穴住居址 1 軒が検出された。御殿場遺跡は富県北福地にあり、縄文中期竪穴住居址16軒、平安時代竪穴住居址 3 軒が検出された。昭和42年度土地改良事業、昭和50年、昭和58年宅地造成事業によって緊急発掘調査を実施した。

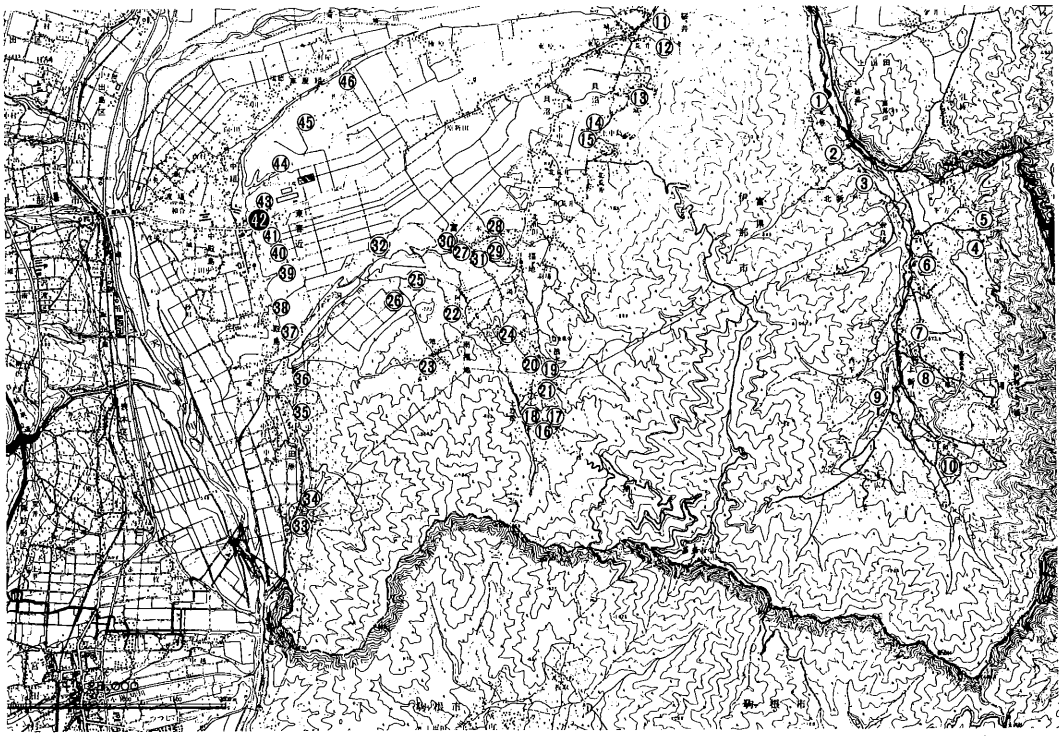
根木谷中畑遺跡は富県北福地根木谷にあり、平安時代竪穴住居址 6 軒、土師器、須恵器、灰釉陶器の検出をみた。発掘調査の動機は昭和51年度、県営圃場整備事業によった。小御堂遺跡は昭和51年度に県営圃場整備事業により緊急発掘調査を実施した。伊那市富県南福地竹松にある。平安時代竪穴住居址 2 軒、土師器、須恵器、灰釉陶器の検出をみた。阿原古墳は昭和44年度に緊急発掘調査が実施され、次のことが判明した。円型（直径 9.45m、高 1.15 m）粘土床、直刀 1 、鉄鏃 1 、土師器、須恵器出土。

三ツ木遺跡は市内富県北福地三ツ木にあり、圃場整備事業によって緊急発掘調査を実施し、次のような遺構・遺物の検出をみた。縄文早期積石遺構18基、押型文土器、撚糸文土器、弥生後期竪穴住居址 2 軒、古墳時代竪穴住居址 4 軒、平安時代竪穴住居址 1 軒、土師器、須恵器、灰釉陶器。

上原遺跡は東春近車屋共栄にある。土地改良事業によって破壊されるとのことで、昭和51年度に緊急発掘調査を実施し、中世の竪穴住居址 2 軒、中世の竪穴 3 基、中世の集石土拡 5 基、中世の土拡 8 基の検出をみた。

中世に入って東春近地区は春近領の一角と考えられている。春近領は各所にみられるが信濃国に限って記してみると次のようになる。 高井郡―奥春近志久見郷（現下高井郡栄村）、更科郡―船山郷（現更埴市南部千曲川右岸地方）、筑摩郡―近府春近　塩尻郷東西（田川を境にした旧塩尻町東西地方）、小池郷東西 （現松本市寿の小池の田川東西地方）、島立郷新村南方・大妻南方（現松本市街地の西方から梓川を越えた南安曇郡梓川村地方）。

現存している東春近の中世城館跡は三カ所あり、それらを記してみると次のようになる。保谷沢の城（東春近田原）、殿島城（東春近中殿島）、城（東春近中殿島）、なかでも殿島城は伊那市を代表する中世城館跡の一つである。　（飯塚政美）



第１図　　春富地区遺跡分布図　（１：75,000）

遺跡の名称

●富　県

① 北林	② 今泉	③ 奈良尾	④ 芝王
⑤ 舟ケ洞	⑥ 中平	⑦ 宮原	⑧ 合の原
⑨ 小松	⑩ 和手	⑪ 大塚古墳	⑫ 上垣外
⑬ 宮の花	⑭ まこもが池	⑮ 御殿場	⑯ 菖蒲平古墳
⑰ テマテ古墳	⑱ テマテドウセギ古墳	⑲ 根木谷古墳	⑳ 根木谷中畑
㉑ 手間手	㉒ 不幸路	㉓ 八人塚	㉔ 小御堂
㉕ 阿原古墳	㉖ 高岱	㉗ 蚕玉古墳	㉘ 羽根原
㉙ 羽根田	㉚ 駒合古墳	㉛ 三ツ木	㉜ 駒ケ原

●東春近

㉝ 瀬戸古墳群	㉞ 男塚古墳	㉟ 宮の上古墳	㊱ 社宮司古墳
㊲ 田原寺古墳群	㊳ 古寺古墳群	㊴ 洞古墳群	㊵ 大沢古墳群
㊶ 本城古墳群	㊷ **宮場間様墳丘群**	㊸ 老松場古墳群	㊹ 下原
㊺ 中原	㊻ 上原		

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

東春地区の県単道路改良事業(県道沢渡・高遠線)は、近年、道路幅の狭い個所を遂次拡幅してまいりました。この時点では埋蔵文化財は一カ所も該当しませんでした。昭和59年度の事業地区内には宮場間様1号墳が該当しましたので、工事着工以前に調査にかかる運びとなりました

発掘調査地区はすでに買収済みであり、また工事の日程上夏場の真最中、7月下旬から8月上旬にかけて実施されました。宮場間様1号墳の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって、伊那建設事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので市教育委員会を中心にして、宮場間様1号墳発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

伊那建設事務所長と市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

宮場間様1号墳発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢　一雄	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	山口　豊	伊那市教育委員長	
調査事務局	小林　勝	伊那市教育委員会教育次長	
〃	竹松　英夫	〃	社会教育課長
〃	柘植　晃	〃	〃　課長補佐
〃	武田　則昭	〃	〃　係長
〃	高木いずみ	〃	〃　主事

発掘調査団

団長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	福沢　幸一	〃
〃	飯塚　政美	日本考古学協会会員
〃	小池　孝	〃

第3節　発掘日誌

昭和59年7月27日　晴　テント及び発掘器材を伊那市考古資料館より運搬し、テントを林の中へ1張り建てる。毎日暑い日が続く。

昭和59年7月28日　晴　昨日建てたテント付近の整理、整頓。明日からの発掘場所付近のヤブ切り実施。墳丘へ至るまでの道づくりをする。

昭和59年7月30日　晴　道路用地の境界線上に東西にテープを張る。グリット打ち。発掘作業にかかる。墳丘の実測、レベルを計り等高線を引く。墳丘の西側付近を掘る。

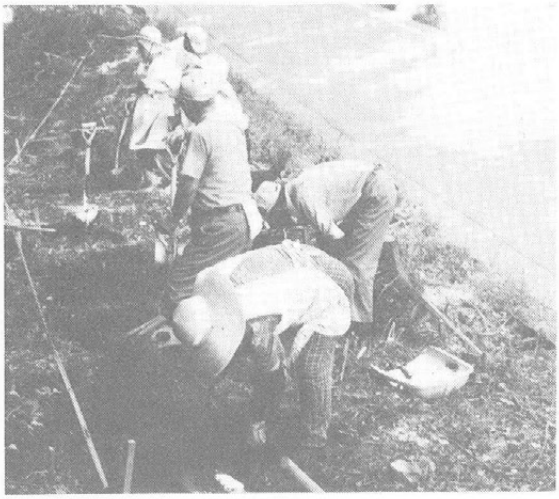
昭和59年7月31日　晴　墳丘の北側、用地外ギリギリの調査をする。耕土剥ぎを実施する。数日間掘れども、掘れども遺物は何も出土しなかった。耕土は極めて薄く30cm位であった。

昭和59年8月1日　晴　墳丘の北側、用地内の東側の掘り下げ及び新しい個所の耕土剥ぎを実施する。ヒノキ林の抜根作業をする。

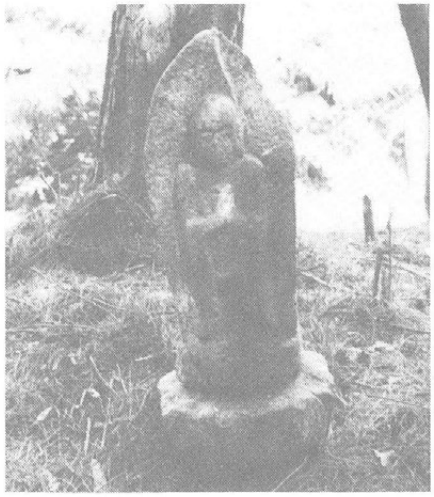
昭和59年8月2日　晴　用地内で掘った個所の清掃をする。清掃をした部分と、墳丘断面の写真撮影を済せる。

昭和59年8月3日　晴　墳丘北側の断面図及び全測図の作製をする。テントをとりこわし、あとかたづけをし、伊那市考古資料館へ器材を運搬する。　（飯塚政美）

発掘風景



発掘風景（墳丘の北側）



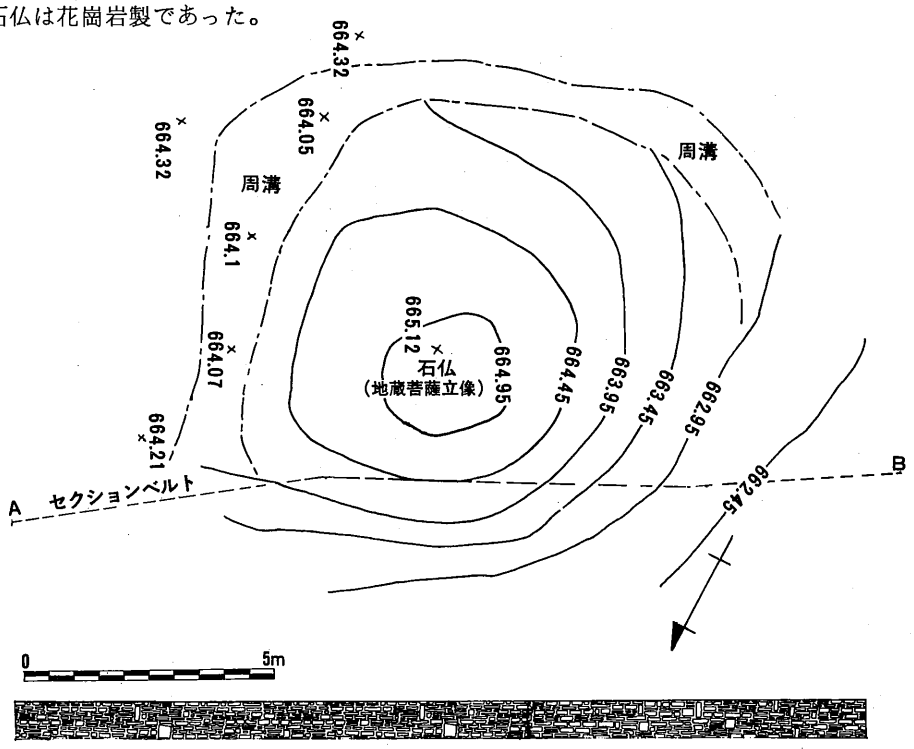
墳丘頂部に建つ石造地蔵菩薩立像

第Ⅲ章　遺　　構

第1節　墳丘及び地層

宮場間様1号墳は県道沢渡・高遠線拡幅工事により、墳丘北側の一部分の調査だった。本墳丘の規模は南北推定9ｍ位、東西9ｍ位を測り、円墳状を呈している。東側から南さらに西側にかけて周溝が廻わっている。周溝の幅は60cmから2ｍ位あった。

墳丘の高さは1ｍ位ある。現況で周溝の深さは30cm位である。墳丘付近には南北2ｍ30cm位、東西2ｍ50cm位の平坦部が存在しており、この平坦部の南側の方に石造の地蔵菩薩立像があった。この石仏は花崗岩製であった。



第2図　墳丘及び地層実測図

墳丘を築いた土は上から耕土（松葉を多く含む、有機質分が多い）。黒褐色土（粒子が細かく粘質に富む。上面は耕作土をやや含む）。黄褐色土（粒子はやや大きく、粘質に富む）。ローム層（ソフトローム層、粒子は細かく、粘質に富む）。

発掘調査を実施してみるに、墳丘に使用された石は全くみられず、ただ土を盛っただけであった。さらに、調査を実施していくと地山に近い面に江戸時代末期～明治時代初期頃と思われる有田焼染付皿の破片が1片出土した。出土した層位からみて、本塚は近世末期から近代初頭頃の構築物と断定できえよう。付近には今回調査したような塚は十基程存在しており、なかには南無阿弥陀仏の石碑が墳頂に存在しているのもあった。

いろいろの状況からして十三塚の可能性が強いように思われる。　　（飯塚政美）

墳丘東側の周溝

墳丘南側の周溝

第Ⅳ章　遺　物

第1節　磁　器

磁器は本塚の地山近くの層より出土した。近世末期から近代初頭頃に製作された磁器であり、産地は有田と思われる。皿型の器型で内面に藍色の染付を施してあり、その文様は菊花文を題材としている。低い高台が付けられ、高台に2本の藍色染付の線がつけてある。

胎土は極めて精選されている。

（飯塚政美）

磁器出土状況

第Ⅴ章　ま　と　め

宮場間様1号墳は墳丘の土層の状態、及び墳丘内の出土遺物からみて、近世末期から近代初頭頃の構築物であることが判明した。近世に構築された塚には経塚、富士塚、神仏に関連した山伏とか雲水の塚、十三塚等々があげられる。これらの塚の築かれた条件、あるいは築かれている所の諸特徴からみて、宮場間様1号墳は十三塚の可能性が強いように思われる。現在、東春近地区で数多くの塚の存在が知られており、これらは大部分、古墳としてとらえられているが、今回の調査の知見からして、古墳として疑わしき塚の存在性を考え直してみる必要があろう。従って綿密なる再調査が重要視されてくる。

ここで十三塚の意義について述べてみることにする。現段階では確定した説はない。
十三塚の研究に最初に興味を持ち、若干の考察を加えた人として、江戸時代に貝原益軒があげられる。明治時代に入って柳田国男氏が考古学や考古学雑誌に十三塚に関した報文を出し、その分布、築造、付属伝説等々について記してある。昭和23年に柳田国男、堀一郎共著「十三塚考」が一冊にまとめられた。

「十三塚考」に記述してある主なる事について記してみる。十三塚は名称をみると大部分が十三塚であるが、地域的に若干の異なった呼び方がある。関東地方では十三坊（法）塚・十三本塚。東北では十三壇・十三法壇・十三森・十三仏塚。九州では十三部塚・十三塚原・まれに銭神壇・将軍塚・十三人首塚・山伏塚・別当塚等々である。村の入口または村の出口、つまり村の両端に置かれる例が多い。並列状態は最も多い例が直線的に一列に並列する例で、小円形のもののみの分と、中央または端にやや大形をおく例がある。

柳田国男は十三塚について次のような説を提唱した。1戦死者や殉死者を葬ったとする説。中世の民間信仰に深く関係する十三仏信仰を築造起源とする説。四臂不動尊を中尊とする十二天曼荼羅の十三仏を勧請築壇したとする説、築造には修験者が関係したとする説。

十三塚には外部施設が施されていないのが一般的と考えられている。なかには石壇状の遺構が存在しているのもある。今回調査を実施した宮場間様1号墳は墳丘の北側一部分だけであったので、付属施設の実態はわからなかった。宮場間様1号墳付近には数多くの墳丘が存在しているが、これらは中殿島区の民間信仰の構築物の一つの現われであろう。十三塚の存在している付近には神社寺、城跡が一般的に数多くある。

東春近地区には宮場間様のほかに、田原山の庵の南、下殿島古寺の東側段丘上、中殿島護国寺東側に十三塚がそれぞれ実在している。

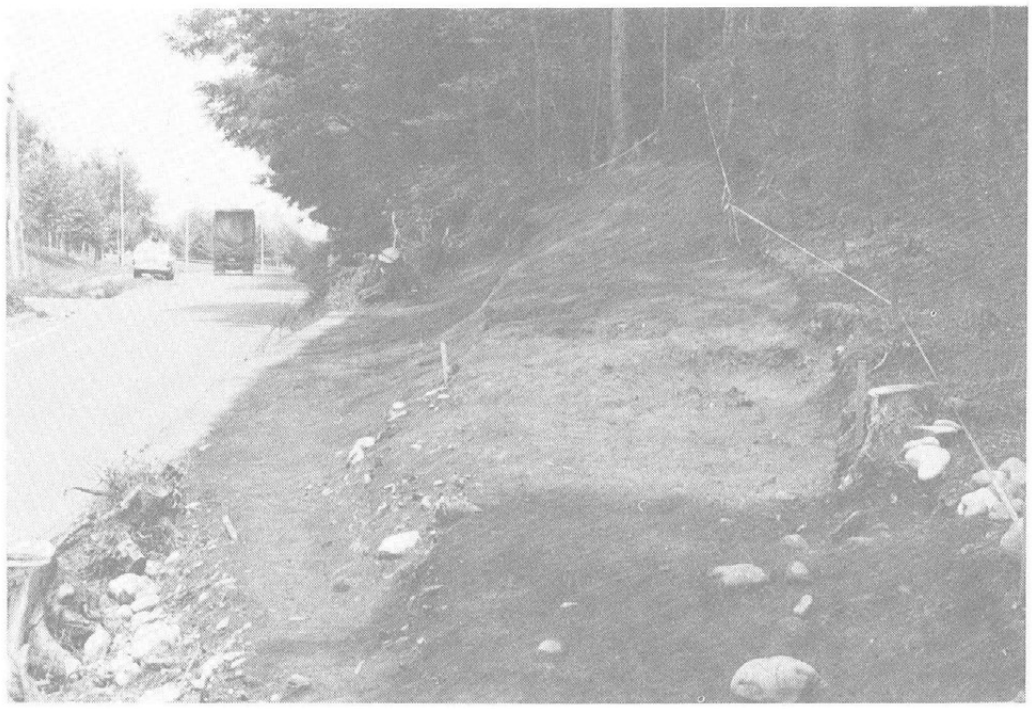
最後に、本報告書の作成にあたっては、伊那建設事務所用地課職員一同、地権者の野溝定芳氏、作業員の皆様の多大な御支援に紙上をもって心から御礼申し上げる次第であります。

（飯塚政美）

図版１　墳丘全景（東側より眺む）

図版２　墳丘全景（北側より眺む）

図版 3　墳丘の土層（北側より眺む）



図版 4　発掘調査実施地区（西側より眺む）

宮場間様１号墳

—緊急発掘調査報告—

昭和60年２月25日　印　刷
昭和60年２月28日　発　行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　千　代　田　印　刷